



令和4年度

鹿児島県の教育

4・5月号

巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
長 鶴丸高等学校長
前田光久
県連合校長協会会長

ベテラン教師とDX

連合校長協会は、昨年度百六十一名がご退職により退会され、今年度百六十六名を新たにお迎えし、小学校長部会長に西園香緒利校長、特別支援学校長部会長に迫田博幸校長が就任された。全国でも珍しい四校種校長会の連合体という特性を活かしながら、当面する様々な教育課題の解決に向け、今年度も会員の皆様の積極的な取組と相互の連携・協力をよろしく願いたい。

さて、コロナウイルス感染症への対応も三年目に入った。この間、小中学校ではGIGAスクール構想とも相まった形で、「学びの保障」をその軸とした学校のDX化が進められてきており、高校でも新学習指導要領が実施される今年度の新入生から、生徒全員へのタブレット端末配布が予定されている。これに関して文科大臣からは「今後は授業などで端末をマスタアイテムとして活用していくための支援を行う」とのメッセージが出されたが、このことは、授業での端末活用がもはや教師であるための「必修科目」であり、「未履修」を避けるためには校長の「支援」が「マスト」であることを示している。

世の中の変化に応じて子どもたちに身に付け

て欲しい力も少しずつ変わっていく。当然のことながら、デジタルネイティブ世代への指導の在り方も不断の工夫改善が求められる。しかしながら、長年の経験を基に築かれた授業スタイルを変えることは結構難しい。ベテランと呼ばれる人ほど授業法に自信を持っており、改善の必要性を感じにくいのではないかと。

この点について島根県教育魅力化特命官の岩本悠氏は「年齢を重ねるほど、特に従来のやり方で成功体験を重ねてきた人間ほど固くなりやすいものである。ただ、そうした人たちが変わろうとすることの影響力は非常に大きい。自分や周りの人間の学びを阻害しないためには、年をとるほど『意識的に』学びに向かう必要がある。」と指摘している。果たしてベテラン教師に対する校長の「支援」はいかにあるべきか。今まさに管理職としての姿勢が問われているように思う。

感染症の終息が見えない中、本協会においても各種会合の多くを中止または書面開催とせざるを得ないところではあるが、今こそ四校種がそれぞれに、また校種を越えて知恵を出し合いながら、子どもたちの幸せのために一歩でも前に進んでいくことを願っている。

令和4(2022)年4・5月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有)アクト印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	読書案内	13
提言	2	校長会館のご案内	15
退任にあたって	4	一般(助)県校長会館だより	16
新任の抱負	7	編集後記	16
ある日の校長講話	11		



学校経営の一方策

西田(小)市 園 田 あけみ

昨年度、新一年生として不安気に入學した子どもたちが、この一年間で驚くほど成長して二年生になった。まず、表情に力強さが出てきた。声がよく出て自分の思っていることをはっきりと伝えられるようになっていく。学校のことなら何でも知っているかのように、校内での動きも機敏になって迷いや不安を感じられない。一年間の学校生活や家庭との連携等を通して、達成感・成就感を味わい自信をつけてきた姿であると感じている。担任はもちろん、関わった職員を取組と指導力の成果を子どもの姿で見せてくれたことに「ありがとう」と思わず言った。「教育は人なり」という言葉をこれまで幾度となく聞いてきた。教師の力量や人間性が子どもに成長に大きく影響し、子どもたちの姿となる。昨今は、教師の在り方や指導力が問われるような事例もあり、教師一人一人の意識・資質向上が学校運営上の課題でもある。同学年として進級した子どもたちが、学級(担任)によって差が出るのではないようにするには、組織の力を生かした教師の資質向上が必須である。そのことが、校長として、学校と職員を守り、説明責任を果たすことにつながると信じている。そこで、これまでの課題をもとに、重点内容として事例とともにいくつか挙げていきたい。

一 学校全体として

- (1) 適材適所(校務分掌)
- (2) 共通理解・共通実践
- (3) 一事徹底
- (4) 成果と課題の追究
- (5) 討議・議論

これまで、学校全体の共通実践が十分に徹底されないことがあり、教務・生徒指導・保健主任が解決策に苦慮していた。また、学年経営の難しさにおける相談も学年主任から受けた。組織としての機能を活性化させるためにも、各主任がやる気とやりがいをもつて経営に参画できるようにしなければならなかった。適材適所の配置をする必要性から、本年度の校務分掌の配置作成には、半年をかけた。教師一人一人の特性(指導力・考え方・経験等)の把握に努めた。よさや特性、課題等を考慮し、学年部として相互に補完し合うことができるようにメンバー構成を行った。

二 学年部等として

- (1) 学年経営目標と具体策の確認
 - (2) 発達段階に応じた指導方法の研究
 - (3) 共通実践の徹底
 - (4) 専門性を生かした交換授業の実施
 - (5) 相互参観の実施
- 学年主任には、子どもや家庭の状況等に加

え、メンバーとなる職員のよさや専門性、課題等を踏まえた具体的な運営の在り方や活かす場について助言を行った。指導力の向上については、昨年度から一部の学年で開始し成果につながった交換授業や相互参観などについても提案をした。それぞれの得意分野や課題としている授業等の相互参観では、よさや専門性が活かされ、提供者の更なる自信と、参観者の指導力向上の機会となったことから、本年度は、より多くの学年部等で実施できるようにした。学年全体の指導力が向上することにより、子どもたちの喜びや成長を学年部等の喜びとして共有させたい。

三 管理職として

- (1) 人事評価記録書(面談)における目標と具体策の確認
 - (2) 教師一人一人のよさや専門性の把握
 - (3) 評価と指導
- 管理職としては、日頃から職員とのコミュニケーションに努めながら、よりよい関係性の構築を目指し声かけを積極的に行っている。時には「さすが先生」と頑張りを賞賛し、時には厳しく苦言を呈し(すかんことを言う)つつ、助言し励ましている。
- 私もこれまで多くの方々の指導を受けてきた。特に残っているのは、痛いところを突かれたときの指導である。当然、その時はへこみもしたし、指導してくださった先輩や上司の顔を直視することすらできないときもあった。その時は、もう二度と同じ失敗で指摘されたくないという意地があったように思う。自分が失敗ばかりで後悔してきたからこそできる「職員の変容に結び付く指導」に努めていきたい。



教職員が誇りをもつ学校に

武中(市) 鮫 島 敦 浩

今年度の学校経営も、コロナ禍でのスタートとなった。様々な知見や経験が生かされる三年目とは言え、各校の共通課題であろう学力向上や生徒指導の充実に向けた取組には、多くの校長が苦心されているのではないか。「新しい生活様式」を踏まえた教育活動が必須な中で教育目標を達成するには、今年度なりの状況に応じた判断と工夫が求められ、リーダーシップを発揮すべき校長の苦労は日々続くことを覚悟しなければならぬ。

各校ではブランドデザインが作成され、学校教育目標達成に向けた教育実践が始まっている。そこで、本校の学校経営を充実させるために今年度心掛けていくことを述べたい。

一 認めて誇りをもたせる

武中学に誇りあり。この言葉は、本校の生徒指導の共通理解事項をまとめたハンドブックの最初に記されており、校歌の最後の言葉でもある。生徒へは機会を捉え、指導の際に触れてきた言葉である。授業でも生徒指導場面でも、その指導が十分に効果を発揮するには、教職員と生徒に信頼関係が必要である。そうであれば、誇りをもつ生徒育成には、誇りをもつ教職員であってほしいと思う。

ある研修会で、「働きやすい職場づくりより働きたいのある職場づくりをめざしてはどうか。」と指導を受けたことがある。古いデータではあるが平成十八年度文部科学省委嘱の教員意識調査結果には、「仕事に誇りをもっている」項目の教員の自己評価は一般企業より高いとある。その意識の持続は、業務改善への取組が重点項目である中で何の手立ても無いままでは難しいとも考えられる。

先日、職員朝会の中である教員が次のように発言した。「この時間割は、A先生が時間を見つけて必死に考えなんとか完成させてくれた。ぜひ、ありがとうの声掛けをしてほしい。」と。教職員の中に、お互いを認め合おうとする雰囲気が出てきたことを大変ありがたく思った。「認められている」という実感が、誇りにつながる。誇りは一人で築けるものではなく、人々との関わりを通じて醸成されるものである。」と聞いたことがある。

校長は率先して、教職員が取り組んだ結果や取り組んだ態度を認めるようにしていきたい。そして、時間割担当教員の頑張りに触発された教員がいたように、ひたむきな姿から自身も積極的に動こうとする、意気に感じる雰囲気を生

み出せるようにしていきたい。
二 伝わるコミュニケーションで認め合う
マスク越しの会話になってから、教職員同士のコミュニケーションが少なくなっていないか心配している。特に、表情が読み取れない中、ノンバーバルでの伝わりは低下していると感じる。

指示や連絡の中にも、労いや励ましの言葉を入れたい。それは、どう伝えるかばかりではなく、どう伝わったかにも配慮した説明、言葉掛けでありたい。相手の教職員がうなずいたり表情が変化したりしたかを見届けたい。これまでの職員会議での発言の中には、相手の意見を一方的に否定したり個人的見解で協力できない旨を説明したりするものがあった。これらは、コミュニケーション不足による不満が要因となっていることも多かった。管理職とだけでなく、教職員同士の対話を促す手立ても講じたい。その一つとして、「どう思う。それはどうして。」という問いを發し、教職員同士が意見を交わす機会を様々な場面で行っていききたい。このような取組を通して、教職員同士の理解が深まり、共感できる組織になってほしいと願う。

冒頭で述べたように難しい状況があるからこそ、今の学校の経営を任せられた意味をしっかりと受け止め、校長職のやりがいを感じ誇りもてる日々を送りたいと思う。県校長協会、各地区校長会のネットワークや県小・中学校長研究大会要録に記された様々な実践が、これからの学校経営充実の心強い支えになってくれると期待している。



大切にしたい情報の共有

一般財団法人鹿児島県校長会館前副理事長
前県連合校長協会小学校長部会長

前鹿児島市立山下小学校長
六 笠 登 由

二年間、小学校長部会長をさせていただきましたが、コロナ禍でほとんど会長らしい仕事ができず、申し訳なく思います。これまで行われてきた校長研究大会や各種会合も、ほとんど中止となり、先生方と学校経営等について話ができなかったことがとても残念です。今思えば、三年前秋田県で先生方ときりたんぼ鍋をつつきながら、地元の酒を酌み交わし、情報交換をした日々がとても貴重なことに思えてきます。

退任にあたり、あれをしておけばよかった、これをしておけばよかったと今更ながら後悔の念に堪えません。この紙面を通して、その思いの一端をお伝えし、後進に委ねることにしたいと思います。

まず、学校課題に係る情報の共有化です。全国連合小学校長会や九州小学校長協議会の役員は、ここ二年間ほぼ参集することがかなわず、オンラインで各県の情報等について情報交換をする場を設けてきました。その際、他県の役員の方は、教値を挙げて御自身の県の情報を提供してください。例えば、GIGAスクール構想に係る情報交換では、「本県の一人一台端末の導入状況は、〇〇%です。」「タブレット

PCの持ち帰りをしている市町村の割合は、〇〇%です。」のように、すぐに回答されるのを聞きして、いつも驚くとともに、本県でも何とか情報を集めることはできないかと思うことでした。ちなみに他県では、学校課題に関する情報を調査する組織があるようです。現在の私の学校課題の一つは、小学校高学年における教科担任制です。他県では、研究協力校やモデル校を設け、研究を進め、推進の仕方が示されていますが、県内ではあまり耳にしませんでした。教科担任制を説明してある資料を見ると、大きく①交換型②連携型③追加型の三通りが紹介されています。交換型はある教科が得意な先生がその教科を受けもつというように教科を交換する方法、連携型は小小連携・小中連携・小中一貫校のように学校を超えて連携する方法、追加型は加配により追加する方法です。国は、令和四年度に教科担任制を拡大するため、教員の加配定数を九五〇人増員していますが、鹿児島県に配置されるのはこのうち百分の一程度の約十人と思われま。この数では、到底③の追加型は無理です。この冊子が出される頃、各学校ではどの方法をとっておられるでしょうか。

次に、教科・領域等の校長間の連携です。本県の教科等研究会の多くが、県小学校教育研究会に所属しているのは、先生方もご存じのとおりです。これは、過去に県教委から研究助成金が出されていた名残だと思えます。当時は、各教科等の代表校長や事務局長の名簿を作成していたものと推測できますが、現在は無いようです。そこで、県教委にお願いして、教科等担当指導主事を通して、一部の会長名を紹介していただきましたが、残念ながらすべてを網羅していないと思われる。私も、自主研究団体の研修案内の公文が届くたびに、名簿に追加していただきましたが、完成しているか自信がありません。各教科等の会長名や活動内容紹介の一覧があれば、職員に研修を推奨する際に役立てられるのではないかと思っています。間もなく、教員免許更新制が発展的に解消することとなつていきます。その新しいキーワードは、「対話と奨励」だそうです。校長には、教員との会話を通して、資質向上のための機会に関する情報を提供し、資質向上に関する指導助言を行うことが求められます。その際、県連合校長会のホームページに、自主研究団体の研究及び研究公開の案内があれば、参考の一つとなるのではないのでしょうか。

「自分でしておけばよかったの！」という声が聞こえてきそうです。アフターコロナ、定年延長、変形労働時間制など、大きな変革期が続きます。校長先生方の御活躍と県連合校長会がますますの発展を祈念しています。

出合いが財産



一般財団法人鹿兒島県校長会館前理事
前県連合校長協会中学校長部会副部会長

前伊敷台中学校校長
平田和利

今年春は、定年退職という節目が迫っていることを意識しながらも新型コロナウイルス対応に追われる日々であった。これまで当たり前のように実施していた授業や部活動、学校行事などは、固定概念にとらわれず、柔軟な教育活動の見直しを余儀なくされた。

毎年楽しみにしていた西門横の河津桜は、二月上旬から開花しはじめ、約一か月を経て満開になり、すでに葉桜状態である。細い枝を太い枝が支え、太い枝を太い幹が支えている姿は、何かを問うているようにも思える。

ところで、教育は出合いであるとか、人生は出合いであるとかよく言われる。私たちが同じ職場の職員として出合っているその事実の中で、さりげない一言や行動で人の心を動かす精神的なつながりが、今後の生き方を導く羅針盤となることがある。期限付きで赴任した学校の校長との出合いは私の大きな財産となった。「教師は常に澄み渡る秋空のように美しい心を保っていなければ、師たりえないであらう。」というのが、先生の教えであった。そして、職員を守ることはできるのは校長しかない、という経営哲学を根っこに据えて、学校経営を不動の

ものとされていた。私が生涯の仕事として教師の道を選んだのは先生との出合いの結果であり、有難い教えという精神的な出合いのおかげである。もし、この出合いがなかったら私の生涯は、違った方向に展開していただろう。その後、私は一念発起して必ず教師になることを決意し、その道中に置いていくな方とお会いでき、沢山の生き方の教訓を得ることができた。

ある校長は、樂觀的なものの見方、チャレンジ精神で諦めないことを教えてくださった。先生は、過ぎ去ったことをよくよするな、という樂觀論に基づいて、アイデアや構想を描くことが有効である、と語られていた。人生は心配の繰り返しかもしれないが、過去の失敗をいつまでもよくよとしていけると、次の仕事に手がつかない上に、手をつけても能率よく仕事ができずに成果も上がらないものである。

また、ある教頭は、自分の思い込みだけでなく、柔軟に対応する能力の必要性を教えてくださいました。先生は、子どもや保護者のために頑張るのも良いが、いつしか子どもや保護者の立場を忘れていてのではないか、という「立場」にこだわっておられた。セブン&アイ・ホールデー

ングスの前会長鈴木敏文氏は、「顧客のために」と「顧客の立場で」は意味がまったく異なる、と繰り返し述べている。これは学校マネジメントで考えたとき、子どもや保護者のために頑張るのではなく、子どもや保護者の立場で頑張るのだと言い換えることもできるのではないか。

北京冬季オリンピック女子カーリングは、史上初の銀メダルを獲得した。試合では、四番目に投げる司令塔のスキップの出来が結果を左右する。その補佐的な役割で三番目に投げる吉田知那美選手は、前回のオリンピックから、技術的な向上はもちろんであるが、オリンピックそのものへの向き合い方が一番大きく変わったということである。それは宇宙飛行士・野口聡一さんとの出合いにより、野口さんと自分との共通点を知り、色々なアイデアをいただいたことで、自分自身の価値観が大きく変わったことがきっかけとなったそうである。

長い教員人生の中で、先輩や同僚の方々からいろんなことを教えていただいた。無言の中で教えられることも多々あった。そして活字を通じての出合いもあった。新年度を迎え不安に思うこともあるだろうが、新しい出合いが財産になると捉えれば前向きになれる。多くの巡り会いを喜び、自己を見つめる人生の糧を得たいものである。自然の生命の形にも似て、私たちが支えるものは何か、美しい形でつなぐものは何か、ということを自分に問うて見てはどうか。

最後に、今後の県連合校長協会の益々の御発展と会員の皆様の御活躍を祈念申し上げます。



「子どもの一生を預かっている」

一般財団法人鹿児島県校長会館前理事
前県連合校長協会中学校長部会副部長

前重富中学校長
米山 武彦

「教師という仕事は、子どもの一生を預かっているという意識がないとうまくいかない。教師は、それだけの覚悟がいる仕事である。あなたは、子どもの一生を預かる覚悟がありますか。」
ある教育長から御指導いただいた言葉である。

最後の学校に赴任してすぐに、「パイロットや電車の運転士は乗客の命を預かっている。教師は生徒の一生を預かっている。」と紙に書いて校長室の壁に掲示した。

ある日、校長と話したいと、不登校生徒の両親が校長室を訪れた。子どもが不登校になったきっかけや学校の対応などについて、その当時の経緯をパソコンで作成した書類を手にも、母親が話し始めた。子どもに対する教師の言葉や対応に不満があり、時折かなり強い口調になったり、涙を流したりしながら話をされた。父親の話にも対応した教師や学校に対する不満が表れていた。二時間ほど話し合いを行い、両親が校長室を出ようとしたときのことである。父親が私に近寄ってきて、壁の掲示物を指して「私は航空関係者なんです。あの通りです。あとは（校長に）お任せします。」と言って帰られた。

私たちは、子どもの健やかな成長に対する保護者の強い願いがあることを忘れてはならないと感じた。

近年、教師のプライベートゾーンが進み、どの中学校においても学級担任や部活動顧問を希望しない教師が増えていると耳にする。学校における様々な課題は、組織で対応しなければならぬ状況が増えており、個人よりも組織としての力が求められている。学校が成果を挙げるには、学校全体の仕事合理的に分担され、チームを構成する教師一人一人がそれぞれの立場・役割を認識し、学校の目標達成や課題解決に向けて協働しながら教育実践に努めることが大切である。校長は、全体的な視点から校務分掌を工夫し、決定していくのだが、年度末、次年度の校務分掌がなかなか決まらない。学校は教育目標を達成するための協力組織であり、教師はその組織体の一員である。教師それぞれの事情があることは理解するが、担任、副担任を問わず、未来の鹿児島を、日本を担う子どもたちの土台づくりを担当しているという教師としての覚悟が問われているように思う。

今日、教師を見る周囲（社会）の目は、私たちの初任の頃よりも厳しくなっていると同時に、教育に対する考え方も多様化している。社会から学校や教師の姿勢が問われ、学校や教育委員会に、頻繁にクレームが寄せられる。教育の問題は、教育に直接携わる教師を抜きにしては語れない。だからこそ、「子どもの一生を預かっている。」ということを常に

自覚するとともに、使命感や職責感をもって日々の教育実践に取り組み、地域や保護者の信頼を高めることが求められている。

昨年度からの中学校新学習指導要領の全面实施にあたり、それまで、「予測困難な時代」に対応する資質や能力の育成が必要であること、機会あるごとに保護者に話をしてきた。まさか、その想定外のことを目の前で起こり、その対応に迫られるとは思っていませんでした。

新型コロナウイルス感染症によって、私たちは「当たり前前日常」がいかに大切であったのかに気づかされた。学校でも様々な行事や取組について、例年通りと考えがちであったところを、実施してよいかから検討するとともに、どうすれば実施できるのかを考えるようになった。こういった検討は、ある意味、学校の取組を総点検する大切な視点にもなったのだが、校長として新型コロナウイルスの対応に頭を悩ますことが続いた。

このような時、県連合校長協会をはじめ、地域の校長会の存在は大きかった。難しい判断を迫られ、情報を交換したり、考え方を聴いたりして、問題解決の方法を探った。こうした連携を通して、単に問題を解決することだけではなく、何を大切にすべきかに気づかされ、生徒のためにどのような判断をしたらよいかを常に考えるようになった。

コロナ禍によって、県内の校長が一堂に会する校長研修会は開催されなかったが、県連合校長協会や各地区の校長会の果たしている役割を再確認した。急激な社会の変化や想定外の出来事は今後も多くなっていくであろう。子どもの一生を預かる学校が新しい時代に対応していくために、連合校長協会のますますの発展が期待される。

新任の抱負



感謝の気持ちを忘れずに

西原小(隅) 小林 晋也

はじめに

校長が担う重責は計り知れない。募る不安を抱える中、前任地である鹿児島市教委の諸先輩方の御厚意で、新任校長となる職員に対し、校長としての心得や業務に直接関わる実践的なアドバイス等を御指導いただき会が設定された。貴重なお言葉を傾聴していると、ある先輩が「職員を家族と違って仕事をして」と語られた。自分は、一度もそのような気持ちで仕事をしたことがない。会終了後、自席に戻ると、一枚のファックスが届いていた。そこには、新天地となる西原小学校職員からの歓迎ぶりを表す温かい言葉が書かれてあった。文末の「一緒に頑張りましょう！」というフレーズを読んで、先程のお言葉が心に響いた。

二 伝統校として

本校は明治四十二年に創立し、今年で

百十三周年を迎える。長い歴史を持つ伝統校であり、校長室の棚に並ぶ十年おきに刊行された記念誌一冊、一冊にも重みを感じる。北西には雄大な高隈山が連なり、校庭に出ると、その揺るがぬ姿を一望することができる。校内は至る所に美しい季節の花が咲き誇り、教育的環境も整っている。

これまでの伝統を継承し、優れた教育的環境を維持していくために課せられる責任は決して軽いものではないが、心強い味方「チーム(家族)西原」とともに、リーダーシップを発揮しながら頑張りていきたい。

三 子どもたちの不思議な魅力

四月六日。保護者の方々が優しいまなざしで見守る中、令和四年度西原小学校入学式が始まった。これまでに経験したことがない緊張感を抱えながら壇上に立ち、一呼吸置いて前を見ると、あどけない顔をした六十三名の新入生が、姿勢も崩さずしっかりと椅子に座っていた。わたしよりも遙かに不安は大きいはずなのに、まっすぐな瞳を向けて座って

いる子どもたちを見た瞬間、感極まり、一瞬言葉が出なかった。同時に式辞を持つ手の震えが止まり、自然と声も出て、滞りなく読み終えることができた。子どもたちにしかない不思議な魅力に助けられた入学式を、わたしは一生忘れないであろう。式を終え、改めて本校全児童一人一人を預かり、守り、育てていく決意が固まった。

四 地域の思い

日課である登校前の安全指導に立つと、多くの子どもたちが元気よく挨拶を返す中、少し元気がない子どもも見受けられる。PTA役員会でその話をすると、「是非、地域と学校で子どもたちが喜び、元気を取り戻せるような行事をしましょう。」と御提言いただいた。同じチームとして課題をしっかりと受け止め、すぐに協力してくださる。学校と地域、相互の思いが合致したことで、更なるパワーアップした「チーム西原小」。校長として、このチーム力を維持できるように研鑽に励み、必要な資質の向上を図っていきたい。

五 おわりに

新任校長として、多くの方に励まされ、支えられながらスタートを迎えることができた。心から感謝申し上げたい。これから様々な課題に直面するであろうが、チーム一丸となって克服できるよう、身を引き締めて日々精一杯、校長として尽力したい。

新任の抱負



鍛えし心 己が道

朝日中(大) 山 宗 功

はじめに

「鍛えし心 己(おの)が道」朝日中学校の校長室に掲げられている校歌の一節。その文字の上には風に向かって立つ馬の絵画。慈愛に満ちた表情で壁に並ぶ歴代の校長先生方の写真。

三月末日に前任の夏迫校長先生から引継ぎを受けるために朝日中を訪れた私の心に、校長という一校の経営を任される職責の重さが現実味を帯びて迫ってきた。

四月一日。英気と情熱に溢れる職員のままざし。引継ぎ以降の「私で大丈夫だろうか」という不安は一瞬で消えた。

学校は組織。当たり前のことであるが、気負うことなく、職員力を借りながら、共に理想の学校づくりを進めていくことを決意した。

二 朝日中学校について

本校は、戦後間もない昭和二十三年、三方村立第一中学校として開校した。その後、昭和三十年の名瀬市と三方村の合併により、名瀬市立朝日中学校と改名された。

地域住民は、本校を「地域の学校」と慕い、教育への関心がきわめて高い。学校に全面的に協力をする姿勢があり、体育大会の八月踊

りや鳥唄の指導などにも協力を惜しまない。また、生徒は素直で明るく、礼儀正しい。生徒会が中心となり、正門前でのあいさつ運動や校内行事、奉仕活動等にも積極的に取り組んでいる。

部活動も盛んで、全校生徒の八割以上が所属し、それぞれに目標を持って技術の向上や精神的な鍛錬、仲間づくりに励んでいる。文武両道を目指し、毎年、地区大会はもとより、県大会、九州大会、全国大会にも出場し、実績をあげている。

さらに、生徒は学校内だけでなく地域においても、地域清掃等のボランティア活動や、敬老会や相撲大会等の地域行事にも積極的に参加している。

三 自分の生き方を求め今を大切に

本校の学校教育目標は「自分の生き方を求め今を大切にする朝日中学生を育成する」である。

私が赴任する前からの学校教育目標であるが、この学校教育目標には、現代の中学生に求められているキャリア教育や道徳教育が内包されている。将来の自分を思い描き、自分が何をしなければならぬかを常に自問自答しながら学校生活を送ることで、日々は充

実する。

前述の校歌の一節は、

試練の嵐強くとも 鍛えし心 己が道

若き血潮の高鳴りに理想の星を仰ぎ見る

という三番の歌詞の一節であるが、ここにも朝日中学校の生徒の目指すべき姿が色濃く表されている。

「耐雪梅花麗 一梅の花は寒い冬を耐え忍ぶことと春に麗しく咲くという。また、良い馬は風に向かって立つと言われる。

己を選んだ道、輝かしい未来のために、今の苦難を厭わずに試練に立ち向かう心を朝日の子どもたちに育みたいという、先人の願いや地域の思いを大切にしたい。歴代の校長先生方の写真がそう語りかける。

四 おわりに

本校のキャッチフレーズは、「礼を正し、場を清め、時を守る」である。この言葉は、これまでの教師生活で何度も口にした言葉であり、不思議な縁を感じる。この言葉の生みの親の森信三氏の別の言葉にも初任者の頃にいたく感銘し、教師として大切にしてきた

「教育とは流れる水の上に文字を書くような儂いものだ。だが、それを岸壁に刻み込むような真剣さで取り組まなくてはいけない。」

初心忘るべからずというが、新任校長として初任者の頃の新鮮な気持ちを思い出しながら、本校の生徒・職員のために常に謙虚な気持ちで教育活動に携わっていききたい。

新任の抱負



創立百十三年目からの進化に向けて

志布志高 松崎 浩隆

はじめに

令和四年四月一日、かごしま県民交流センターにて行われた、県立学校新任校長・転任校長辞令交付式に出席した。県教育長から各校長一人一人に辞令が手渡され、私自身、新任校長としての重責をずしりと感じた。辞令には、「鹿児島県公立学校長に任命する鹿児島県立志布志高等学校長に補する」とある。改めて見返してみても、身が引き締まる。これまで四半世紀にわたり、様々な教育現場を様々な立場で歩ませていただいた経験や、半世紀に渡る人生訓に裏打ちされた英断をしていきたいと考える。もちろん、経験してないことも出てくるだろうが、チーム志布志のリーダーとして、着実に歩を進める所存だ。

二 学校の概要

志布志高校は、創立百十三年目を迎える、本県屈指の歴史と伝統を有する学校で、旧制一中（鶴丸高分校甲南高）、二中（川内高）、三中（加治木高）、四中（川辺高）に次ぐ六番目に設立認可された学校と記録されている。また、曾於地区を代表する進学校としての歴史も古く、卒業生数は二万人を超え、政財界や教育界、芸術・文学・スポーツ界等、日本国内に止まらず、全世界に卒業生を送り出してきた。かつて国務大臣や副総理を務め

た二階堂進氏、画壇最高峰の巨匠海老原喜之助氏と吉井淳二氏、高校三年生の国体で二百メートル平泳ぎの当時の世界記録を出した山口観弘氏等、多くの著名な人材を輩出している学校として、校長室にはこの方々の書や作品、色紙等が所狭しと飾られている。色褪せることのない実には輝かしい実績である。

また、これまで一世紀を超える間、社会の近代化への大きなうねりと共に、学校も幾多の変遷を重ねてきた。しかし、本校建学の精神は、校訓「叡・志・剛」として、一貫して今日まで受け継がれ、今でも躍動している。切磋琢磨し勉学に勤しむ美風を目指す「叡」、日本人の美徳を柱とした奉仕の精神の「志」、質実剛健の気風を目指す「剛」、これらを持ち合わせた人材に成長してほしいとの願いが込められる。つまり、知・徳・体のバランスのとれた人材育成を目指し、教育活動を行う学校である。在校生は、この精神を立派に受け継ぎ、学校生活を元気に送り、学業はもとより、部活動や生徒会活動、ボランティア活動等にも意欲的に取り組む。そんな本校も、近年では少子化の影響や私学の台頭で、生徒募集にはかなりの苦戦を強いられている。

三 古豪復活を期して

四月四日の職員会議冒頭挨拶は、自己紹介からスタートした。コロナ禍の中、歓送迎会も皆無であるため、新任校長の素顔を知ってもらおうべく、まずはこれまでの職歴、学校現場での主な業務履歴、趣味嗜好の分野、自分の大事にしている信条等の紹介から入り、学校経営方針に繋げた。職員にどう写ったかは不明だが、自分の人となりを理解してもらおうところからと考えた。校長は、年度当初、各行事各場面で挨拶のオンパレードだ。文才のない自分にはかなり高いハードルだが、これこそが校長の人となりを知らしめる最大の本務であるとも考える。生徒・職員のハートをくすぐる視点を常に持ち、言葉の力を最大限活用していきたいとも考える。また、高校の校長は、地域の社会教育委員他多くの役割を担う。地域に愛され、応援される学校づくりの第一歩は、こうした任務を丁寧に進めたい。ことと信じ、課題克服に繋げていきたい。

四 おわりに

今年度の学校経営方針のスローガンは「創立百十三年の伝統の継承と躍進」。その中の四つの見出しは、①大隅地区を代表する公立進学校としての自負 ②主体的で豊かな人間性の育成 ③大規模校では難しい「面倒見の良さ」④募定確保に向けた「チーム志布志一丸となつての学校活性化」である。全人教育を基盤に据えるが、不易な部分も感じつつ、進化する志布志高校でありたい。外部有識者からも本校の課題を御指摘いただいている。ただ、自分の肌感覚も大事に、進学校として結果を残すことへのこだわりは失わないよう、全職員で面倒を見る気風を作り上げていく。

新任の抱負



新任の抱負

指宿養護 山下 英一

令和四年四月一日、県民交流センターにて鹿児島県立指宿養護学校校長の辞令交付を受けた。午後からは、校長室で定期人事異動により同日着任した職員と学部主事に辞令を交付した。校長としての初仕事である。その夜、田舎の八十を超えた父親に報告の電話をした。

「父ちゃん、今日辞令を受けて校長先生になれたぞ。」

「そうか。良かったね。しかし、なれたのではなく、周りの皆様から校長にさせてもらったのだから、皆様に恩返しをしないとよ。」

との返事が返ってきたのだ。父親は学校教育としては中学まで。今では、身体も弱り、認知症も思い始めている。そんな父親から核心に触れるような話を聞かされた。

三十二年前、新採として小学校に赴任した当時は目の前の子どもたちと必死になって毎日を過ごしていた。先輩教師や保護者ともよく語り合った。新採の四年間でお世話になった方々に、私の教師としての礎を築いていただいたと思っている。二校目から特別支援学校での勤務がス

タートした。そこでも目の前の子どもたちの健全やかな成長・発達を目指して子どもや保護者、先輩教師から学ぶことが多かった。「子どもの後ろには保護者がいる」ということを念頭に子どものために、さらには保護者のために、「より良い指導とは」を問いながらやってきた。この思いは今でも変わらずもち続けている。

本校学校教育目標に、「豊かな生活と社会参加・自立の実現に向けて、一人一人の障害や心身の発達に応じて」とある。本校児童生徒の障害種は、知的障害、肢体不自由、病弱であるが、その状態像は一人一人違う。当然、本人や保護者の思いも教育的ニーズも違う。そのような子どもたちの将来像を、本人・保護者と学校が共有し、夢の実現に向けて一丸となって取り組むことが大切である。そのために、校長として常に理想や夢を語り、具体的な目標を掲げて率先して教育実践に取り組まなければならないと考えている。

平成十九年は特別支援教育元年と言われ、「特殊教育」から「特別支援教育」への転換が始

まった年である。その頃から特別支援学校に対する期待が高まり、同時に特別支援教育のセンター的役割も大きくなった。このような特別支援学校の校長として、今思うことは一つ「この子らの十八歳の春をどう迎えさせるか」である。小学部からの入学、中学部からの入学、高等部からの入学と、在学期間は違えども、どの子ども十八歳を迎えると社会へと巣立っていく。本校を巣立ってからの時間の方がはるかに長い子どもたちに在学中にどれだけ丁寧な指導ができるかが一人一人の十八歳の春につながると思っている。

先日、第一回職員会議で「わ」について話した。それは、「対話が深まるほど互いに尊重し合える」、「融和することで価値観も考え方も違う教師集団が融合する」、「調和することで全体がほどよく釣り合ってまとまりができる」という「わ」を意識して創造力豊かに挑戦することが、私の学校経営の素であるということである。全職員が人権尊重の基本理念の下で、互いを尊重し合いながら子どもへの指導及び支援について率直に意見を出せるような仕掛けが必要であり、その一つとして、校長室を含む学校全体を風通しのよい空間としたい。

一人一人の子どものために、特別支援教育の充実・発展を目指して、今後も思いを巡らせ続ける。皆様に恩返しができるように。

ある日の校長講話



奇跡的な出会いに感謝

大川小(北) 中能 健 尚

みなさんは、奇跡という言葉を知っていますか。高学年のみなさんは、聞いたことはあるのではないのでしょうか。「交通事故にあつてケガ一つ無かったのは奇跡だ」「サッカーワールドカップ日本、奇跡の優勝」など意味を辞典で調べてみると、「普通には考えられないような出来事、不思議な力が働いて起こる出来事」と書いてありました。

先生は、人と人の出会いも奇跡だと思っています。世界中には、たくさんの方が生きています。日本という国だけでも、一億人以上の人々がいます。そのようにたくさんの方がいる中で、一年生から六年生、そして先生と、それぞれの立場

は違っていても、人と人が大川小学校で出会って、一緒に学校生活を送っていることは、本当に奇跡的なことだと思います。

ですから、私たちは、この奇跡的な出会いを大切にし、一緒に過ごした思い出をいつまでも忘れないでいたいものです。けれども、寂しいことですが、出会った後に、いつかは必ずお別れをするときがやってきます。

昨日の卒業式では、六年生のお兄さん、お姉さんとのお別れがありました。そして今日は、一緒に楽しい日々を過ごした先生方とお別れをする日です。

今から紹介する先生方に、みなさんは、いろいろなことを教えていただいたり、助けていただいたりして、たいへんお世話になりましたね。分からない問題を分かるまで優しく教えてくださった先生、昼休みに一緒にドッジビーをして遊んでくださった先生、他にもたくさん思い出が尽きることもなく湧き上がってくることでしよう。こんなにすばらしい思い出のある先生方とお別れするのは、とても寂しいことです。けれども、たとえ学校は替わっても、先生方とみなさんの心はしっかりとつながっています。先生方に教えていただいたこと、助けていただいたこと、親切にいただいたことを心に刻み、今日は感謝の気持ちをしっかりとお伝えしましょう。

今の自分、

最高の自分、未来の自分

長屋小(南) 竹ノ内 三千代

令和三年度は、夏に東京、冬に北京でオリンピック・パラリンピックが開催されました。多くの選手の感動的な活躍の場面が、今でも鮮やかに脳裏によみがえりますね。

フィギュアスケートの羽生結弦選手は、これまでに二度金メダルを獲得し、大きなプレッシャーの中、四回前半ジャンプに挑戦しました。シヨートプログラムで、スケート靴のブレードが氷の穴にはまるというアクシデントで八位と大きく出遅れます。その時、「正直、努力して報われないと思いました。いろいろなことを積んできても、どんなに正しいことをやってきても、報われないときは報われない。」と話しています。予期せぬことで思っていた結果が出せなかったことは、かなりのシヨックだったことでしょう。しかし、「最高の自分に挑戦して勝つことが大事」と考える羽生選手は、フリーで前人未踏の四回前半ジャンプに挑戦しました。メダルをねらうのであれば、確実な演技を選ぶことも考えられたでしょう。

目標実現のために、毎日毎日、血のにじむよ

うな努力を続けても、それが結果に結びつかないことがあります。しかし、その努力は決して無駄ではない。努力を続けてきたことが、次の目標の実現に向けての大きな力となります。

また、羽生選手は必ず一礼してリンクに入っています。練習後もベンチをふき、リンク周りや更衣室などの掃除をしているそうです。それは、東日本大震災の時の多くの方々のおかげがあったおかげで、スケートができていたことへの感謝を忘れないという気持ちからだそうです。

夢をかなえるためには、華やかな面だけを目指すのではなく、自分の弱い心に負けず、活躍の裏で人に見せない努力を続けること、支えてくださる方への感謝が大事だということです。自分にとって今一番大切なことを考え、最大の努力を重ね、未来に輝く自分の姿を想像する長屋小の子どもであってほしいと思います。



「守・破・離」

大口中央中(始) 東 正 昭

いよいよ三年生は、公立高校入試まで後僅かとなりました。これからは、体調を整えて大口中央中生としての自信と誇りを胸に、「絶対合格するぞ!」という強い気持ちで自分の力を出し切り頑張ってください。そのことが必ずや良い結果につながると信じています。

さて、今日は剣道や茶道の教えにある「守・破・離」についてお話しします。まず、「守」とは、先生からの教えを忠実に守り、ひたすら基礎・基本を身に付ける段階です。次に、「破」とは、これまで築いてきた基礎を基にして、自分の殻を破って自己の技を磨き創造する段階です。そして、「離」とは、あらゆる修行の結果として極め、師を離れて自己の流派を構築する段階です。これらは、人が人として成長するために必要なステップだと考えます。

そこで、私は、それぞれの言葉を中学校生活に置き換えてみました。まず、「守」とは、一年生の段階であり学校生活の基礎・基本をしっかり守り、大口中央中生としての土台を築く段階です。次に、「破」とは、二年生の段階であり自分の殻を破り、自分で考え自分で判断して

大口中央中生として学校生活の中身を充実させる段階です。そして、「離」とは、三年生の段階です。大口中央中学校の顔として、様々な活動に積極的に取り組みながら良き伝統や文化等を後輩に引き継ぎ、やがて学び舎を離れ次の段階に進む。いわゆる卒業の段階です。こうして人生において初めて、自分で決めた進路先へと自立に向けた一歩を歩き始めるのです。

このように、「守・破・離」の教えは、剣道や茶道にとどまらず中学校生活にも通ずるものがあると、私は考えます。皆さんもそれぞれの学年での学校生活を振り返りながら、次の段階に向けて積極的に取り組みましょう。そして、着実に成長してくれることを期待します。

最後に

「三年生、全員合格目指して、気張れ!」



読書案内



■井芹貴志 著

凡事徹底

南小(市) 川 路 道 文

熊本市の中心部から阿蘇方面に車で四十分の
大津町に熊本県立大津高等学校がある。この
サッカー部は、夏のインターハイや冬の高校選
手権では熊本県内で最多の出場回数を誇る全国
大会の常連校である。小さな町にある普通の公
立高校でありながら、これまで約五十名のJ
リーガーを輩出してきた学校でもある。

このサッカー部を指導してきたのが、平岡和
徳先生である。先生は、熊本県松橋町の出身で
あるが、帝京高校で選手・主将として二度の全
国制覇を成し遂げ、筑波大学では主将として総
理大臣杯準優勝や関東大学リーグ優勝など輝か

しい戦績を残している。大学卒業後、故郷の熊
本県で高校体育教師となり、部活動でサッカー
部を指導し、大津高校をサッカーの強豪校に育
て上げた。

なぜ、そのようなことができたのか。そこ
には、先生のサッカーを通して「人づくり」を徹
底するという強い教育理念があったからである。
この本には、サッカーを指導するトレーニン
グメニューは書かれておらず、むしろその土台と
なる人間教育や育成の考え方が書かれている。
このことは、書名の「凡事徹底」からも想像で
きるのではないだろうか。その具体的内容には、
①あいさつの徹底②学校生活の充実③礼儀④
ルールの厳守⑤正しい努力の継続の五点が掲げ
られている。その意図について知るのも、この
本の魅力でもある。一つだけ紹介すると、先生
は「(あいさつで)心を開くことが指導者の言
葉やアドバイス、チームメイトからの指示や要
求を素直に聞くことになり、それが自らの技術
の向上や、成長と進化のベースには不可欠であ
る」と言う。この言葉からも先生の育成の考え
方が伺える。

先生は、現在、大津高校の教頭を経て宇城市
教育長に就任されている。先生のサッカーを通
じた人づくりに触れながら、これからの人づく
りの参考になる一冊である。

内外出版社 一四〇〇円

■わび 著

メンタルダウンで地獄を見た 元エリート幹部自衛官が語る この世を生き抜く最強の技術

中津川小(始) 福 永 雅 一

本書は、自衛隊で上司のパワハラが原因でメ
ンタルダウンし休職を取ることになった著者
が、復帰後の自衛隊経験や社会人経験などで身
に付けたメンタルコントロール術、仕事や人間
関係に対する向き合い方などをまとめた本であ
る。文部科学省が公表した調査によると、学校
の先生で精神疾患で休職した人は、令和二年度
五千八百八十人となった。過去十四年間、ずっと
五千人前後を推移しているようだ。一か月以上
の病気休暇を取得した人まで入れると一万人弱
で、どんな学校でも、いつ、だれが精神疾患で
休職・休暇を取得しても不思議ではない状況だ。
九州中央病院メンタルヘルスセンターの資料に
よると、休むに至った原因の一番目が「対処困
難な児童・生徒への対応」、二番目が「保護者
への対応」、三番目が「管理職との関係」となっ
ている。

心が疲れているサインは、一気に表れるもの

ではなく徐々に表れてくる。「ごはんがおいしくなくない」から始まり、思考や体調が普通でなくなってくる。大事なものは、自分の心身の状態を常に把握しておくこと、そしてメンタル疾患に陥らないための予防と早めに回復をはかるようにすることであるようだ。だから、私たちは、会話や日頃の様子の中から職員の心身の健康を把握しておくことも必要だ。また、何かにイライラしているときは、無意識のうちに何かに依存や執着しているときなので、「まあ、いいか」とつぶやくことも気持ち落ち着かせるのには良いようだ。いつもぎりぎりの人生を歩んできた私も事あるごとに「何とかなるだろう。」とつぶやいていたような気がする。

日頃から緊張感を持ち経営について考えている管理職の中には、ストレスを感じている人も多いだろう。そんなとき、本書を読むと、「なるほど。」と思うことも多く気分転換になる。仕事なんて、「人生を楽しむための手段の一つ、人生の究極の目標は本来の自分であり続けること。」と考え、「人生という壮大なゲームを楽しみましょう。」という著者の言葉には、胸にぐつと来るものがあった。

ダイヤモンド社 一四〇〇円＋税

■ 渋沢栄一 著 守屋淳 訳

現代語訳 論語と算盤

知根小(大) 中島 保男

二〇二一年のNHK大河ドラマ「青天を衝け」の主人公、二〇二四年から新しい一万円札の顔となる渋沢栄一。ご存じのとおり資本主義の制度を設計し、約五百もの会社の設立や五百以上の慈善事業にも関わり、「日本資本主義の父」「実業界の父」と呼ばれ、ノーベル平和賞の候補に二度も選ばれた偉人である。そんな渋沢栄一の講演を口述筆記でまとめたものが「論語と算盤」であり、本書はその現代語抄訳版で、原著より平易な表現でとても読みやすい。

北海道日本ハムファイターズ前監督の栗山英樹氏は、「論語と算盤」を野球指導や組織づくりに役立てるとともに、毎年、新人の選手に配布していたという話は有名である。野球人としての成功はもとより、それ以上に人間的に大きく成長してほしいとの願いを込めて渡っていたらしい。また、大リーグで大活躍している大谷翔平選手の愛読書にもなっている。

「論語と算盤」が執筆されたのは百年ほど前であるが、今の時代にも十分通用し、うなずけ

るところがたくさんある。時代を超えて読み継がれている名著である。

筆者の渋沢栄一が混迷する時代の逆境の中でも、国をよくしたいという志を持ち、生涯その志を忘れることなく貫き通したところや好奇心を持ち、様々なことに挑戦したこと、何より人を大事にし、思いやりの心で接したことで人脈に恵まれたことなど学ぶべき点が多いと感じる。「人にはどうしようもない逆境に対処する場合には、天命に身をゆだね、腰をすえて来るべき運命を待ちながら、コツコツと挫けずに勉強するのがよいのだ」は心に残る言葉の一つである。コロナ禍という逆境においては、やるべきことをしっかりやり、あとは天命に任せたい。

本書は、これからの時代を生きぬく上でのヒントがたくさん詰まっております、閉塞感に満ちた現代に確かな指針となり、未来を切り拓く力を与えてくれる一冊である。

手元に置いて繰り返し読みたい。

ちくま新書 九〇二円



鹿児島県校長会館のご案内



- 昭和五十六年五月に鹿児島大学水産学部の裏門近くの現地に会館が完成した。
- 平成二十四年四月に公益事業を行うことを条件に、一般財団法人として認可を受けている。
- 一般財団法人鹿児島県校長会館内で、鹿児島県連合校長協会と鹿児島県退職校長会が会館を借用する形で業務を遂行している。

蓮と鶏

泥のなかから
蓮が咲く。

それをするのは
蓮じゃない。

卵のなかから
鶏が出る。

それをするのは
鶏じゃない。

それに私は
気がついた。

それも私の
せいじゃない。

金子みすゞ

一般財団法人校長会館だより

教育長異動

○新任 令和四年三月四日付

枕崎市 木之下 浩一氏

(前坂元中学校長)

○新任 令和四年四月一日付

鹿児島市 原之園 哲哉氏

(前甲南高等学校長)

○新任 令和四年四月一日付

大崎町 穂園 正幸氏

(前原良小学校長)

○再任 令和四年四月一日付

中種子町 北之園 千春氏

「事務局より」

令和四年度の事務局員は次のようになりま
す。宜しくお願いいたします。

事務局長 四元 光也

事務担当 中夷 美也子

事務担当 濱田 加奈子(4/1から)

※事務担当の北濱美紀は3/31で自己都合退職

編集

後記



本号を発行するにあたり、年度初めのご多用の中にもかかわらず、玉稿を寄せいただいた執筆者の皆様方に、厚く御礼申し上げます。

前回、本欄を担当した際に、多くの先輩方から感想や激励のお電話をいただきました。懐かしいお声に大変ありがたく感じると同時に、本誌が時間や場所を越えて、学校経営に携わる方々をつなぐ重要な役割を果たしていることを実感するものでした。

その中で、ある校長先生が、本誌の文書を切り抜き、先輩方の書いた文書を分類して読み返しているとおっしゃってくださいました。そして、そのことにまつわる所感をまとめた文書を送ってくださいました。その中の一節を紹介させていただきます。

「文章を読みながら、今はもう会えない人に出くわす。書きぶりや言葉遣いに当時の思い出す。ここにある言葉はその時代を生きた証でもある。」「学校経営の問題には、答えは無数にあるが、完全な正解はない。しかし、『今』を考えられる自分のバランス感覚だけは大事にしたい。決断の影響が大きいのであれば、偏るのは実によくない。ましてやメンツに流されてはいけない。校長室で一人考える時、先達の名言とシンクロナしてくれば、よい判断が近そうだ。」

校長室で一人、思考を巡らす度に、情報が溢れる中で、鹿児島において先輩方が綿々と紡がれてきた教育の不易も、激しく変化する社会の中で創り出していく流行も、どちらも見据えながら判断し、自校を経営することの重要さと困難さとを痛感します。本誌を通して、多くの示唆をいただき、自己対話をさせていただけることに感謝する日々です。

内 健史(郡山中学校)